

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

らい はい 礼 拝

平成28年10月第2週放送

れいぎ れい おが
礼儀の“礼”に“拝む”と書いて、仏教では「らいはい」と読みます。同じ文字でもキリスト教やイスラム教では「れいはい」と読んで区別をします。また神道では文字の上下を入れ替えて、拝礼「はいれい」と表現します。

日本はよく「お辞儀の文化」などと言われますが、言葉を述べる作法を“辞儀”^{じぎ}と言ひ、これに接頭語の「お」をつけて丁寧な表現にしたものが“お辞儀”です。この言葉は挨拶を意味し、特に仏様やご先祖様への挨拶には「礼拝」^{らいはい}を行います。

挨拶にはさまざまなものがありますが、その形は相手を信頼し、危害を加える意思がないことを表明したものであると考えられます。

仏教における「礼拝」^{らいはい}には、立って手を合わせ、合掌^{がっしょう}をして頭を下げる形のもとの、それを更に丁寧にした、五体投地^{ごたいとうち}をする形のもものが多く用いられます。いずれも相手に対する敬意や感謝、報恩^{ほうおん}などの心を形にしたものです。

曹洞宗の修行は、「礼拝に始まり、礼拝に終わる」と言っても過言ではありません。修行道場への入門^{にゅうもん}を山門^{さんもん}の前で長時間待ち、それが許可されると、履物^{はきもの}を脱いで荷物を下ろして、最初にこの五体投地の礼拝を行います。また、修行僧としての修行生活を終え、道場^{あと}を後にする時も同じように五体投地の礼拝をして別れを告げます。更に、修行中は一日に何十回と礼拝を行います。

なぜこのように礼拝を大切にするのでしょうか。

相手に対して頭を下げたりかがみ込んだりする行為は、見方によっては謝罪^{しゃざい}であったり、服従^{ふくじゅう}であったりしているように見えるかもしれませんが。しかし仏教ではそう考えません。『法華経』^{ほっけきょう}に出てくる、常不軽菩薩（じょうぶげいぼさつ）は、会う人会う人に次々と礼拝をします。相手の中に仏の姿を見るからです。

どうげん しょうぼうげんそう
道元禅師の『正法眼蔵』には、「礼拝得髓」（らいはいとくずい）という巻があります。仏法の真髓^{ぶつぽう しんずい}は「礼拝」^{らいはい}であるという意味です。誠の心で礼拝できる者が仏様の教えの真髓を知り、仏法を伝える人となる。そして礼拝の行われるところに菩提^{ぼだい}の道が開かれる、とおっしゃっています。

とかく私たちは、相手に先んじて我が身を^わ低^{ひく}めることを得意としません。日本語の「低姿勢」や「腰の低い」という言葉は、誉め言葉とばかりはいきません。そこ

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

には卑屈^{ひくつ}な意味合いも含まれています。

しかし、仏教の「礼拝」は、我見^{がけん}や慢心^{まんしん}があっては出来ません。自らの都合^{つごう}を捨て去った、まっさらな心で初めて実現されるものです。その時、仏法はそこに自然と現れているのです。

「礼拝に始まり、礼拝に終わる」

修行僧は礼拝を重ねた日々の修行生活を終えて、来た時と同じ道^{くだ}を下って行きます。そしてその道は、確実に菩提^{ぼだい}の道へとつながっているのです。

— 終 —